いりなり、○略中その御ぐどもの屏風どもは、ためうぢ、つねのりなどがかきて、道風こそはえきしがたはかきたれ、いみじうめでたしかし、そのかみの物なれど、たゞいまのやうにちりばまず、あざやかにもちゐさせ給へりしに、これはひろたかゞかきたる屏風どもに、侍從中納言○藤原行成の書給へるにこそはあめれ、

〔後水尾院宸記〕御うぶや以下の次第

覺

一御たんじやうの御だうぐ○略中

御びやうぶ、松竹つるかめ、えろゑ、ふかべりなし、

〔伊勢家秘書誕生之記〕第四屏風

一屏風も白張に、雲母にて松竹鶴龜ヲ書也、裏のかたは龜甲を雲母にて押なり、へりは練龜甲を繪に書なり、

〔大鏡五太政大臣公季〕このおほきおほとのゝ御はゝうへは、延喜の御門の御女、女四宮ときこえさせ、延喜いみじく時めかしおもひたてまつらせ給へりき、御もぎの屏風に、公忠辨、ゆきやらでとよむはこのみこの宮なり、つらゆきなどあまたよみて侍りしかども、人にとりてすぐれのゝしり給ひしかとよ、

〔新儀式四臨時〕奉賀天皇御筭事

中宮職立御厨子於殿西第三間納御衣什物等類也、法皇被賀之時無此御厨子、唯母屋四間副北御障子立淳和御手跡御屏風三帖、

〔古今和歌集七賀〕さだやすの御子の、きさいの宮の五十の賀奉りける御屏風に、櫻の花のちる をたに、人の花見たるかたかけるをよめる、　藤原のおき風

いたづらに過る月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき